

FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！ 学生生活

Vol. 64

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

皆さんは、日本にどれほどの博物館、あるいは博物館相当施設が存在しているか知っていますか。「博物館」と聞くと、どこか堅苦しく、静かで、勉強のために行く場所という印象を持つ人も少なくないでしょう。しかし実際には、水族館や動物園、美術館なども博物館に含まれます。そう考えると、博物館は決して特別な存在ではなく、私たちの日常のすぐそばにある身近な文化空間だといえます。文部科学省の社会教育調査によると、日本国内だけでも5700以上の博物館が



文学部人文社会科学科西洋史学専攻4年
埼玉県立坂戸高等学校出身

夢は博物館全制覇

かしほう
るいな
な
榎 瑠衣奈

あるとされています。さらに世界に目を向ければ、その数は約95000にも及びます。仮にこの世に存在するすべての博物館を1日1館ずつ訪れるとしたら、単純計算でも約260年かかることになります。現代に生きる私たちの寿命をはるかに超える時間です。私がこの事実を知ったのは高校3年生の時でした。それ以来、大学生になったらできるだけ多くの博物館を巡ってみようという心を決めていました。特別な旅行の予定がなくても、授業の合間や休日に一人で足を運ぶ、そんな小さな積み重ねを大學生生活の目標のひとつにしてきたのです。

博物館との出会い

私は小学生の頃から博物館が好きでした。科学や宇宙、恐竜、美術など、幅広い分野に触れられることも理由のひとつですが、今思い返すとそれだ

けではありません。展示ケースの前に立ち、解説文を静かに読み、うなずいていく自分が、少し大人びていてかっこいいように感じられたのです。知識を理解しているかどうかよりも、「わかろうとしている自分」に酔っていた、何とも子どもらしい理由だったと思います。

高校生になってからは一人でも博物館に足を運ぶようになりました。一人で作品と向き合う時間は誰かの感性に左右されることなく、自分のペースで立ち止まり、気になった展示の前で好きなだけ考

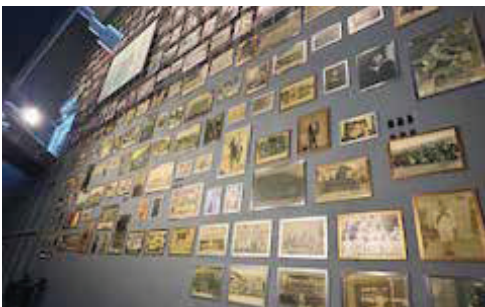
える。その静かな時間が、にぎやかな学生生活とは違い心地良く感じていました。あるとき、高校の授業で人生設計について考える機会があり、その中で私は、「世界中の博物館を巡りたい」という目標を書きました。そこで初めて、冒頭で紹介した博物館の館数と、人の一生では到底巡りきれないという事実を知りました。これほどまでに「時間」というものの有限性を実感したのは初めてでした。しかし同時に、その不可能性こそが、私にとって博物館をより特別な存在にしました。すべてを見ることはできない、だからこそ、ひとつひとつの出会いがかけがえないものになる。限られた時間の中で何を見るのか、どこへ行くのか、何を優先するのか。高校生の私は初めて、自分の「選択」というものを意識し、そこから今の私の博物館との距離感を形



著者的 Best 1 箱根ガラスの森美術館



著者的 Best 2 巨大恐竜展



著者的 Best 3 釜山博物館



作ってきました。

大学生になると、時間とお金に余裕がある限り、とにかく興味のある博物館や展示会に足を運ぶようになりました。私は大学で西洋史学を専攻しているため、上野にある国立西洋美術館や、西洋史に関連する特別展には意識的に足を運んでいます。

教科書や論文の中で平面的に理解していた歴史が、実物の作品や展示空間を通して立体的に立ち上がる瞬間、たとえば宗教画ひとつをとっても、画面の構図や色彩といった要素から、当時の信仰観や権力構造が浮かび上がることがあります。その体験は、文字情報だけでは得られない感覚を与えてくれます。

また、大学で学問として歴史を学ぶようになってから、博物館は単なる「好きな場所」から「思考を鍛える場所」へと変化しました。知識が増えた今でもなお、解説文を読んでも理解できない箇所に出会うこともあります。作品の意図が掴めず、もどかしさを感じることもあります。手元にある電子端末で検索すればすぐに答えがわかる世の中ですが、博物館では、すぐに答えを調べようとはせず結論が出ない問いを抱えたままその空間を歩き続けます。しかし、その疑問に向き合う時間は自分の思考の癖や限界を知る時間

もあり、知識を得るだけでなく、未知への探究心を探す場所、それこそが、博物館の本質的な価値なのではないかと思うようになりました。

止まり木のような場所

同じ博物館や展示を何度訪れても、感じ方は少しずつ変化します。高校生の頃は雰囲気や見た目の印象に惹かれ、「きれい」「すごい」といった直感的な感想だったものが、大学生になってからは歴史的背景や制作意図と結びついて見えるようになりました。それでも時々、事前知識がなくても目を奪われその場に立ち尽くしてしまう出会いをすることもあります。

大学生活は講義、課題、アルバイト、就活など時間がいくらあっても足りないと感じるほど常に何かに追われており、目まぐるしい日々です。そんな中で博物館に足を運ぶ時間は、私にとって日々の忙しさを忘れて立ち止まれる時間です。展示室の静けさの中で作品と向き合っていると時間の流れが緩やかに、自分が何に興味を持ち、何を大切にしているのかを改めて考えることができます。これから先、社会人になり生活の形が変わったとしても、博物館に通う習慣は持ち続けたいと思っています。博物館は、

学部だより

研究室へ行ってみよう

日本史学研究室

文学部には、各専攻に「共同研究室」があります。今回はその中から、日本史学研究室をご紹介します。

日本史学研究室は3号館7階にあり、閲覧室、演習室、約3万冊を収蔵する書庫で構成されています。閲覧室は大きな窓のある開放的な空間で、専攻の学生だけでなく中大学生なら誰でも利用できる場所です。自習室は、静かに自習するスペースというだけでなく、ゼミの発表前にはグループ学習で意見を交換し合う場にもなっています。

日本史学専攻は、考古学、古代から近現代まで各時代を担当する7名の専任教員と、幅広い研究分野を持つ多数の兼任教員が学生の指導を担当しています。その多種多様な授業の準備に役立つように、研究室では各種の辞典や数多くの専門書籍・雑誌をそろえています。閲覧室の一角には、文献だけでなく考古学的視点からも各時代の歴史を学ぶ、という専攻の特長のひとつを活かした考古学に関する書籍のコーナーも設置しています。近年ではインターネットを介して利用できる便利な辞書・辞典のサイトもあり、閲覧できる資料も増えてきましたが、

歴史を研究するうえでは、いまだデジタル化されない資料や論文がたくさん存在します。そんな資料を直接手に取って見る機会を増やしてほしいと思います。

ここで学ぶ専攻の学生たちは、さまざまな学修を通して自分の研究テーマを見つけ、4年次に卒業論文を完成させて巣立っていきます。大半は一般企業へ就職しますが、各地の博物館の学芸員になったり、中学・高校で教鞭を執ったりしている卒業生も多数います。新入生の中には、「高校で日本史を担当していた先生が中央大学の日本史学専攻出身だった」という学生が入学してくることもあります。

研究室は大学院生や専攻の教員も利用していて、そうした方々と触れあえる場所でもあります。学生の皆さんが、いろいろなものに会って自分にとってのテーマを見つける手掛かりとして、研究室を活用してほしいと思っています。



非日常の空間でありながら、人生の節目ごとに立ち返ることのできる場所です。そしてそれは、知識を蓄積する場所であると同時に、自分自身の変化を確かめる

場所でもあります。すべてを見ることはできないからこそ、ひとつの出会いを大切に。その姿勢こそが、私と博物館を結び続けているのだと思います。